

白金蔭

4月号



平成27年4月発行

第50号

白金葭定例会案内

五月一日(金) 9:30 ~ 17:00 築地市場、東銀座区民館

五月十五日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第五 兼題 苗売、薔薇

六月十九日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三 兼題 グラジオラス、鮎

七月十七日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第五 兼題 鬼灯市、日盛

苗売、薔薇の参考句 (五月十五日分)

苗売の結飯^{むすび}取り出し食ひにけり

苗売が見上ぐ神戸は坂の街

苗売が店じまひする舗道掃く

苗売を病上り妻出て迎ふ

苗売女托鉢僧に先んぜず

ありあまるゆえにくづほる薔薇と詩人

バラ園のホースの水を天に放つ

八十本のバラ宅送さる傘寿の日

我傘寿妻喜寿バラの中歩む

薔薇の園引き返さねば出口なし

薔薇の門サーフィンボード横抱きに

薔薇園一夫多妻の場を思ふ

ロココ美として極まれる薔薇もあり

珈琲はブラック・薔薇はマリア・カラス

阿波野青畝

仁森啓之

品川雨吉

友成吟月

川野みさを

香西照雄

栗田やすし

天川悦子

和多田林雨

津田清子

松本まり

飯田蛇笏

京極杞陽

安西篤

月例会会報 (15 / 4 / 17 8名欠1) (蛤、スカートピー)

飯田孝三

瞼^{まなこ}に生きる誰彼桜咲く

満開の岸の桜に遅れたり

蛤を掘ろうかデズニーシー行こうか

初めての恋文貰ふスカートピー

大仏の耳朵の明るさ涅槃西風

増田陽一

蛤のこゑ完璧の殻の裡

伸びあがり風を悦ぶスカートピー

蛤の腕の重たき幼年期

老年的超越といふ目刺かな

眩^{めくら}めば暗夜の星のごと桜

光成高志

「青べか」の焼蛤の店通る

下向ひてゐしが開いてスカートピー

マドンナはしだい次第にスカートピー

蛤ややつぱり源氏物語

蛤の椀一杯を白くせり

光 みち

湧き水を使ひ蛤のすまし汁

勧め売る九十九里産蛤を

雨降りの続き紫スエートピー

合はせみる手形の遺品花曇

カタカナの国語読本花の雨

吉羽多美子

山寺の竹のさやぎや甘茶佛

青き空のぞくトンネル花の道

片づかぬ娘の部屋のスエートピー

スエートピー習ひはじめのヴァイオリン

蛤を泣かせはじまる厨事

倉田紀子

水中に龍追ひかくる春の夢

おとがひを湯に沈めゐる花の雨

蘆の角スワンボートの水尾光る

花疲れお茶に浮かせりぶぶあられ

花の雲子は通しとも近しとも

松村幸一

人を呼ぶこゑの朧の波止場かな

穴出づる蛇の一尋ひろ東海寺

潔ぎよきかな蛤の開き方

永き日の大仏お顔上げもせず

蝶々になりたいスエートピーもある

武者昭七

スエートピー昔のことサと言つてみる

蛤がつぶやき合つてる桶の中うち

花筏組んで泰然大河ゆき（落花流水）

焼蛤の香り運んで風過ぎぬ

春暁や隅に漂ふ昨日きのうの闇

浅野正美

桜散る薄化粧する通り道

空隠す花のトンネル通り抜け

花供ふパステルカラーのスエートピー

潮汁蛤パカッと口開ける

朝掘りの筍並ぶ道の駅

青木啓泰

蛤の砂吐く月夜の「点と線」

蛤が鳥獣戯画には出てこない

神立の手前の橋で初蛙

粹で出て濡れて行くなり春の雨

声と顔一緒に出して花の山

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

4 蝶々になりたいスカートピーもある

4 蛤を掘らうかデズニーシー行かうか

4 蛤を掘ろうかデズニーシー行こうか

4 蘆の角スワンボートの水尾光る

3 水中に龍追ひかくる春の夢

3 蛤を泣かせはじまる厨事

3 水中に龍追ひかくる春の夢

3 花の雲子ら遠しとも近しとも

3 花の雲子は遠しとも近しとも

3 開く蛤碗一杯を白くせり

3 蛤の碗一杯を白くせり

幸一
孝三

紀子

多美子

紀子

”

高志

2 カタカナの国語読本花の雨

2 伸びあがり風を悦ぶスカートピー

2 焼蛤の香り運んで風過ぎぬ

2 永き日の大仏お顔上げもせず

2 初めての恋文貰ふスカートピー

2 空隠す花のトンネル通り抜け

2 蛤の碗の重たき幼年期

2 片づかぬ娘の部屋のスカートピー

2 スカートピー習ひはじめのヴァイオリン

2 「老年的超越」といふ目刺かな

2 老年的超越といふ目刺かな

2 潮汁蛤パカッと口開ける

1 スカートピー昔のことサと言ってみる

1 「青べか」の焼蛤の店通る

1 蛤がつぶやき合つて桶の中うち（漁村店頭）

1 蛤がつぶやき合つて桶の中うち

1 おとがひを湯に沈めゐる花の雨

1 勧め売る九十九里産蛤を

1 花供ふパステルカラーのスカートピー

1 潔きよきかな蛤の開き方

1 雨降りの続きスカートピー

1 下向ひてゐしが開いてスカートピー

1 山寺の竹のさやぎや甘茶佛

みち

陽一

昭七

幸一

孝三

正美

陽一

多美子

”

陽一

正美

昭七

高志

昭七

紀子

みち

正美

幸一

みち

高志

多美子

蛤が鳥獸戯画には出てこない
粹で出て濡れて行くなり春の雨

大仏の耳朶の明るさ涅槃西風

春暁や隅に漂ふ昨日きのの闇

蛤のこゑ完璧の殻の裡

桜散り薄化粧する通り道

桜散る薄化粧する通り道

朝掘りの筍並ぶ道の駅

合はせみる手形の遺品花曇

蛤ややつぱり源氏物語

蛤の砂吐く月夜「点と線」

神立の手前の橋で初蛙

花疲れお茶に浮かせりぶぶあられ

青き空のぞく隧道花の道

青き空のぞくトンネル花の道

花筏組んで泰然大河ゆき（落花流水）

満開の岸の桜に遅れたり

マドンナはしだい次第にスカートぴー

穴出づる蛇は一尋ひろ東海寺

穴出づる蛇の一尋ひろ東海寺

人を呼ぶこゑの朧の波止場かな

眩めくらめば暗夜の星のごと桜

臉まなぶたに生きる誰彼桜咲く

啓泰

湧き水を使ひ蛤のすまし汁
声と顔一緒に出して花の山

みち
啓泰

孝三

昭七

一句鑑賞

光成高志

焼蛤の香り運んで風過ぎぬ

昭七

正美

焼蛤といえは「その手は桑名の焼蛤」という付け足し
ことばにあるように、桑名の焼蛤が名品である。築地市
場で聞いたところによると、米国産の白蛤は歯応えがあ
るが、味はいまひとつ、^キ6百円、8個でその重さにな
るので、一個70円。九十九里産だと、一個70グラムあ
り、^キ2千円、桑名産はプラス千円つまり^キ3千円。鮑、
榮螺より高い。掲句の蛤は石廊崎海岸という詞書きがあ
ったので、南伊豆の蛤であろう。石廊崎海岸あたりは風
がいつも吹いているだろう。その風が焼蛤の香りを運び
そのまま海に出て帰らない。「風過ぎぬ」の切れが香りと
ともに深閑とした余情を生んでいる。

みち

高志

啓泰

多美子

昭七

孝三

幸一

陽一

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

蛤を掘ろうかデズニシーに行こうか

孝三

さあ春休みだ。浦安に蛤を掘りに行こうか、いやデズ
ニシーに行こうか、祖父祖母子孫と三代喧々譁々話合
っている情景が想像される。きつと若い世代に負けてデ
ズニシーに行く羽目になったに違いない。浅蜷を掘る潮
干狩りではなく蛤の潮干狩りといえども、デズニシー
の多様さ・面白さには負けちゃうよと。蛤に象徴される

「青べか物語」の世界は消滅して一大リゾート地になった現代との取り合わせがなんとも新しい。

空隠す花のトンネル通り抜け

正美

すぐ大阪造幣局の通り抜けを思い描きましたが、小石川植物園の桜並木と言うことでした。あそこはメタセコイアの大木林があつてそこも空隠す新緑の季節を迎えます。「花のトンネル通り抜け」は迅速なフレーズで花の諺みたいなニュアンスがあります。ほんとは「青き空覗く隧道花の道」（多美子）なのだが、四捨五入して空隠すと書いたことで詩になりました。

片づかぬ娘の部屋のスカートピー

多美子

嫁に行つていなくなつた娘の部屋を取って片付けずスカートピーを活けて娘さんを思っていると鑑賞の弁を述べたら、いや娘さんは片づいていないのだから、まだ嫁にも行かず同居しているのではという反論があつた。「片づかぬ」が「娘の部屋」の所有格なら、前者、「娘」のそれならば後者の解釈になる。どちらでも取れるところが面白いとも言える。パステルカラーのスカートピーは娘さんの少女時代をも象徴していて、母親の感慨がそこから浮かび上がってくる。やっぱ俳句は省略が大事。

老年的超越といふ目刺かな

陽一

人間老境に入ると何事も超越して四の五の言わなくなるものです。老年的頑固でないとところが先ずいいではな

いか。目を刺されて綺麗に並んでいる目刺を見てゐるとそういう超越感に誘われた。この詞が諺のようにまだ鍊られていないから、「括弧を取つていいのではということ」で「をはずしました。おそらく作者はそうは言うものの超越した心境になれないことを生きたエンジンにしているのでしょう。書かれた言葉の裏も読むのが俳句です。

一句鑑賞

武者昭七

勧め売る九十九里産蛤を
潮汁蛤パカツと口開ける
潔ぎよきかな蛤の開き方
開く蛤椀一杯を白くせり

みち 正美 幸一 高志

蛤（今月の兼題）といえど大きさと言い、形と言い、味といいやはり貝類のエースだ。その蛤も近年は我が国では絶滅に近い状態であり店頭に並ぶのはほとんどが外国産のものだという。みちさんの句はそんな傾向を踏まえている。「サアサゴ当地さんの蛤だヨ」と威勢のいい声が飛ぶ。正美さん。パカツという擬音語がいかにも生きのいい蛤の口のあけようをとらえて爽快。幸一さん。「潔きよきかな」という感嘆詞が正美さんのパカツに通じて面白い。つくづくと蛤に眺め入り、その見事な口の開け方に「人生かくあるべし」と共感しているのである。高志さん。椀に溢れんばかりの白く熱い汁、手にとればほ

んのりと磯の香りも漂ってくる。ふるさと瀬戸内の海の匂いがよみがえる。

蛤の椀の重たき幼年期

蛤を泣かせはじまる厨事

陽一
多美子

蛤を掘ろうかデズニ―シーに行こうか

孝三

陽一さん。幼年期の回想であろう。あの時手に持った蛤の椀のたしかな重さがいまも手のひらに残っているのである。（「重たき」という現在形がそれをしめしている。）それは幼年期にしてすでに実感した生きることの重さであったかもしれない。多美子さん。台所で蛤が泣いているのは分っているけど・・・。「泣かせ」の一句が凄い。蛤さん御免なさいネ。孝三さん。久しぶりの家族そろっての行楽である。心弾むさまが明るく軽快な口語調に踊って楽しい句。

おとがひを湯に沈めゐる花の雨

紀子

山の露天風呂であろう。あごの先まで深々と身を沈めてゆったりと身も心も解き放つ至福のひとつとき。折から花の雨が一層の情趣を添える。

一句鑑賞

光
みち

花供ふパステルカラーのスカートピー

正美

仏壇の供華としては一風かわったスカートピーを供えた。「スカートピーの季節になりましたよ」と。今でもご

主人の残された家でご主人のことを片時も忘れずに生活されている正美さんです。スカートピーはピンク、白、紫、黄の四色が代表です。いずれもパステルカラーで柔らかく優しい色。花束にもなる水揚げのよい花で香りもあり、周りがぱつと明るくなり、仏さまもあげた本人も和む情景が浮びます。

蛤を泣かせはじまる厨事

多美子

組板で捌く魚には南無阿弥陀仏なむあみだという気持はおきません。でも浅蜷や蛤ではなぜか嫌な気持が働きます。それは生きていくから。「泣かせはじまる」に作者の優しさが感じられる。食肉工場には供養塔があります。動物を食する私たちもその心情で生活しなければと今更ながら思います。

一句鑑賞

飯田孝三

カタカナの国語読本花の雨

みち

とどのつまりの「花の雨」が凄い、その幹旋が。敗戦前は小学一年でカタカナを習った。記憶違いがなければ、昭和二年から十五年までの国語第一課は「サイタ、サイタ、サクラが、サイタ」、第二課「ススメ、ススメ、ヘイタイススメ」。その時代を生きた者にとって「国語読本」は懐かしい。以後の時の移りをふり返るとき、思いはさまざまだろうが、掲句一読、あらためて「花の雨」

が身に入るのである。

永き日の大仏お顔上げもせず

幸一

なるほど、大仏はいつも俯きかげんに在します。「お顔」が秀逸、普段のことばを遣いこなして巧まず、「永き日」の長閑さと唱和、尊い面立ちと慈しみの眼さしを彷彿させる。善男善女ご参詣の春一日、ところは、鎌倉長谷高德院、露座の大仏の膝下の吟である。

蛤ややつぱり源氏物語

高志

一瞬、貝合せの場を思う。源氏は（光源氏とその一族をめぐる）愛と人生の物語、登場人物がいきいきと情趣豊かに描かれ、世界最初の長編心理小説であり、わが国文学の源流をなすといわれる。蛤は古く文芸・芸能と縁が深い。え、でも、いきなり「蛤や」はご大層？いやいや、ほら、海はわれらがいのちの発祥、揺籃の壺。西は遙かエーゲ海、ボツティチェリイの「ヴィーナスの誕生」の海にも繋がるではないか。想像力は時空、方位を超え、芸術の境に亘る。「やつぱり」は、感に堪えず、心底肯じる趣。蛤「や」との阿吽めでたき、廣大無辺をゆく男の一句である。ちなみに、Ge nji は世界的に著名で数カ国に翻訳され、イタリアではよく読まれている。翻つて、「下向いてゐしが開いてスキートピー」の含羞は神妙。蛤の腕の重たき幼年期

「老年的超越」といふ目刺かな

陽一

”

子供は純真無垢とか天真爛漫とかいうが、そんな晴朗な日ばかりではない、氣ぶせな時もある。蛤の腕の「重たき」が、微妙な幼心の翳りを言い止めてみごと。薄白い腕の濁りが目に浮ぶ。（一句目）老境をいう行雲流水、悠々自適は概ね虚辞。「老年的超越」とは、どこぞの最近の成句とか、いい得て妙。その意は知らず、目に入る皿の「目刺」が老境を象徴するかに、「超越」の実感が面白い。作者によると、～「いふ」で切る、「目刺」はこれを食べる。うーむ、「かな」の述懐に俳諧の骨張を見る気がする。（二句目）

片づかぬ娘の部屋のスキートピー

多美子

整頓が苦手の娘さんの部屋はいつも散らかし気味、そこに飾るスキートピーの可憐な風情とのインビバレンスが面白い。対して、いやいや、今に嫁いかぬ子の乙女ごころをいとおしむ、情愛が滲む。「片づかぬ」は未婚の謂い、とばかり句会が盛りあがる。しまいには作者も後者に同調し、情愛派が大勢。セクハラと言われそう、いや、ことば狩りは伝統文芸の沃野を涸らす等々、賑やか、和やか。（出句一覽掲載順）

一句鑑賞

増田陽一

蛤を掘ろうかデズニーシーに行こうか

孝三

潮干狩りの海岸とデズニーランドに付属した海とは近

くだからどちらにしようか、迷うのでしょうか。蛤が兼題であるけれど、潮干狩りとは言わないで蛤を「掘る」と、こだけ細かく言ったところがなんと面白いのである。何だか春の行楽のときめきと童心を感じさせる句ではありませんか。

蝶々になりたいスエートピーもある

幸一

マメ科の花一般を「蝶形花」と言う程で、豌豆でも蚕豆でもカラスノエンドウでも花は美しく、中でもスエートピーは観賞用に特化した種類だから、蝶に近いのは了解済みのことである。しかし中には一步進んで本物の蝶になつてしまいたいものもあるに違いない。「翌檜」ではなくて「翌蝶」でしょうか。スエートピーの氣持を伝えるように、句形が軽やかで楽しい。

蛤の椀一杯を白くせり

高志

大型の蛤が開いていると汁椀いっぱいになる。その大きな殻の内側と身の白さが印象的で、さらに白を際立たせているのは椀の漆の黒か朱色の深さである、と言うところに焦点を絞った句でありましょう

スエートピー昔のことサと言ってみる

昭七

スエートピーに触発されて微かな胸の疼きがあった、と言えば恋の記憶であろう。それも初恋に決まっている。ひとは一寸した感覚刺激で忘れていたことを思い出すことがある。紅茶にマドレーヌという菓子を浸した途端に

幼年期の思い出が蘇ったブルースト(注)の例もあるので、油断できない。作者はここで「昔のことさ」とひとりごち、平静を取り戻そうとしたのか。老年の純情ではありませんか。(注) 仏の作家(一八七二〜一九九二) 暗喩の得意な陽一さん、啓泰さんはよく親しまれた作家のようだ。高志記

蛤を泣かせはじまる厨事

多美子

砂を吐かせるため塩水に漬けておいた蛤を洗うとき、貝は舌を引つ込め殻を閉じる。「キュル」とか、音をさせたのであろう。貝を熱くして殺すことになるのを一寸気にしたけれど、それは日常的东西で、馴れた手順で料理をこなして行く。鳴かせ、ではなく、泣かせ、という表現することでこの句のやゝ複雑な味が成り立っている。「蛤を泣かせ」などと江戸文学にはありそうだけれど、筆者は詳しくない。

空隠す花のトンネル通り抜け

正美

空が隠れるほど桜が満開で、だからトンネルなのだけれど、この句では何だか、独りで通り抜けたような氣もしいではない。もしそう感じられれば、華やかな中に凄みが出てくる。ちなみに高志さんに言わせると、大阪中ノ島造幣局の花見は有名で、それは「通り抜け」だけで通じる、と。大阪生まれの僕には微かに幼時の記憶がある。

花疲れお茶に浮かせるぶぶあられ

紀子

「ぶぶあられ」なる言葉を久しぶりに聞いたので、この句を出してみた。関東ではあまり馴染みが「ないけれど、微細な粒のあられで、お茶に浮かせたり、茶漬に入れる」とい香りがする。お茶を「ぶぶ」というのは京大阪の言葉だから、この一語で、「細雪」の中に出てきそうな花見の情緒が浮んでくるのである。

一句鑑賞

松村幸一

蛤を掘ろうかデズニ―シーに行こうか

孝三

どちらを選ぶうか、と家族と語らっている雰囲気が見える。そして又お天気のよい当日のことに違いない。場所だつてそれほど遠くない旧知のなじみ。この句多分題詠と推測させつつ、そうと思わせぬ活気ある会話の臨場感にあふれる。掘ろうか行こうかと未来形で迷っているが、きつと楽しく終つたに違いない一日の果てまで、読み手は見届けてしまう。蛤の例句の中に肩を並べても、きつと異彩を放つに違いない至福の一句。

花の雲子は遠しとも近しとも

紀子

原句は「子ら」だったが、孝三さんから「子は」としたら如何という提案があつて直したものである。これは断然「ら」より「は」が立勝る。一人としたことによつて、この子はすでに成人を越えてひよつとして世帯を持

っているかしのれない人格が立ち現れる。即ち半分以上は、既に他者になつてゐるのだ。「遠しとも近しとも」は地理的遠近よりも、より心情にかかわる。だから「花の雲」が、絶妙に生きてくる。縹渺たる花の雲に託した作者の感慨は、同じ子を持つ読み手に限りなく切ない共感を呼ぶ。しかも限らない暖かさや広やかさに伴つて。

スエートピー習ひはじめのヴァイオリン

多美子

一句を卒読したときいきなり臉に浮んだのは、あろうことか石川節子のことだつた。石川節子即ち明治の詩人石川啄木の妻として、啄木とともに天折を以て貧窮の生涯を閉じたあの女性のことだつた。遠い昔の記憶だが、相愛の二人が住んだという盛岡帷子小路の新居跡に、たしか節子夫人の尽きぬ思いの宿るヴァイオリンが飾られてあつたように記憶するが、ぼくの幻だつたらうか。しかしヴァイオリンに託された節子の愛の夢は、その新生活がわずか三週間で閉じられたように、あまりにも過酷な荊棘の月日が待つていたことは、万人周知の通りだ。「啄木より節子かなしき啄木忌」と読んだことがあつたが、作者の作意にかかわりなくぼくの連想は連想を呼んで、果てしなくなる。のみならずスエートピーが彩色豊かに華麗なばかりでなく、案外な意地と土性骨を伴つて立ち上がる。節操という明治の華を見事に咲かせきつた節子夫人の生涯の象徴のように。勝手極まる読みを百も

承知の上で以上の感銘を記しておく次第。

カタカナの国語読本花の雨

みち

昭和六年入学の尋常小学一年生国語読本は、「ハナハト マメマス」という肉筆めいた楷書の活字で始まっていた。どの頁の絵も華麗なカラーなどとは縁遠く、いつそまが まがしい位地味な墨の一角だった。あの第一頁を緊張した表情で教室中に飡するように揃って朗読したあの友この友は、その後それぞれどんな人生を経て、どんな行方を追ったのであつたらうか。もう一度古さびた木造校舎の教室に相集うて、幼い声を張りあげて読んでみたいよ。それにしても、かえらぬ日の回想を追うてやまぬ今のわが身をふり包みゆく春の花の雨の何という切なさやるせなさ。

ハガキ句四十九報管見

飯田孝三

雲の詩人手賀沼にあそび来られたし

貞治

形と韻が冗漫。「雲の詩人」を初めに措くなら、例えは「雲の詩人舟に蓮にあそべよ手賀沼の」、又は、「雲の詩人舟にあそべよ手賀沼の」だろうか。無季なら後者。その方が雲の詩人にふさわしいかも知れない。

「ざりがに入荷」とありざりがにの使い途 陽一

Ni お手並み鮮やか。Za Ri Ga Ni Ni u ka To A Ri za Ri Ga
No Tu Ka i Mi Ti. i 九音(うち a i 六音) たたみか

ハガキ句四十九報(09/8/25)

例の会の蓮見舟(8/15)

雲の詩人手賀沼にあそび来られたし

「ざりがに入荷」とありざりがにの使い途

稲穂波野鯉のはねる音のして

蟬穴と子どもの足跡点々と

雪加鳴く中天薄き昼の月

吹きぬけて空に漣蓮の花

早稲の香や沼の土手道人屯

貞治
陽一
多美子
春美
敏子
孝三
高志

けるリズムは何やら飄逸。これに、「ざりがに」が「ざりがに」とたたむ濁音が交響、まるで「ざりがに」が容器を引っ掻いてるみたいだ。「使い途」と言い放し、知らん顔なのが、又、心憎い。新仮名づかい「使い途」が面目。

多美子

稲穂波野鯉のはねる音のして

視聴交響、手賀沼縁の情景が彷彿する。結「くして」が初「稲穂波」にはね返り、「野鯉」の“野”が屋上屋ならぬ、視聴要の働きをして、明るい。オ六母音が景を解放、六ナ行音の響きに和む。

蟬穴と子どもの足跡点々と

春美

点々する蟬穴と足跡が目に見える。オ六母音とタ行六音(濁音を含む)の繰り返しが利いている。ト(下)四音の韻きが、殊更、印象的。結「く」とは頭「蟬穴とく」

に回帰する。読み手はそれぞれ何に思いを巡らすだろう。
雪加鳴く中天薄き昼の月

敏子

一読、「薄き」がさわりと気づく。が、雪加を知らない
(歳時記にも殆どのつていない)ため、鑑賞しきれない
憾みがあった。さて、『野鳥歳時記』(山谷春潮著「富山
房百科文庫」)によると「一見、黒茶つぼく、腹がやや黄
色がかった白。だが、仔細にみると背に黒褐色の縦斑。
雀より小さな留鳥。蘆、荻、藺、蒲などが密生してい
る水辺に繁殖する。盛んにピッピッピッ、ジャジャジ
ヤという鳴声を立てる。このピッピッは、張りのある高
い声で、飛びながら盛んに連呼し、ジャジャといつたら
必ず降りるときである。茅花の穂を綴り合わせて巢を営
む習性あり、茅花のある場所を好んで棲息する」(引用は
一部原文を簡素化、傍線は筆者)。季語「雪加鳴く」もむべ
なかな。あらためて「薄き」が腑に落ちてくる。力行四
音の、とりわけ中下句脚韻「キ」の押韻効果に気づく。
雪加鳴き端居にとほき波きこゆ

秋桜子

右歳時記の著者が愛唱措かざる句だそうだが、叙述平
板、調子冗漫。秋桜子調といえはそれまでだが、雪加の
張りのある鳴声が聞こえない。

早稲の香や沼の土手道人屯

高志

手賀沼縁の光景が目に入り。切字「や」が、早稲の香
の空間を大きく取り込んで、明るい。「土手道人屯」の

漢字一団が、土手上に屯する人達の具象を際立たせる。
作者は、屯する中でもいいが、早稲田の畦から土手上を
望観した図としたい。土手に屯する人影が手に取れる。
ここでも、オ五母音繰り返しのリズムが解放感をたかめ
る。

(平21・09・02)

吹きぬけて空に連蓮の花

孝三

つきぬけて天上の紺曼珠沙華(誓子)を連想させる大
景を読まれた佳句。蓮沼の漣ならで空に漣が立っている
その下に蓮の花がある。蓮葉を揺らす風が吹きぬけて空
に漣を起こしたのだ。理屈ではなく蓮の花に陶醉した幻
想である。

(高志記 H 27・3・30)

お便り広場(到着順、敬称略)

三月号頂きました。毎月庄倒されています。斑雪、白
子の説明感謝しています。四月の参考句いいのがありま
すね。今月の句も全くすばらしいですね。なんとか読も
うと枕頭においておくのですが、そのままになっていま
す。編集後記楽しみです。孝三先生が御病気とは知りま
せんでした。皆様の益々の御活躍を祈ります。

(3・30 小山陽也)

桜も散りはじめ、八重系はこれからの楽しみです。ござ
います。日中に比べ夜は花冷えもいたします。先月来、
白金霞四十八、四十九号をご惠送下さいました上、又魅

力的な吟行のご案内まで頂きましてありがとうございます。御礼も遅れ申し訳なく、かつ、恥じ入っております。

二月号、三月号と白金葎もはっきりと生育ぶりが判り楽しく拝見いたしております（表紙）。高志様の「山頂の蠅にまとはれるたりけり」大変印象的で余計なものの一切抜きの秀句と存じ上げます。私は九十二才の老齡冴えることもものもなく後退の一方でございます。皆様のハジッコにお加え下さること光榮に存じております。吟行は何かと忙しくお供出来ないと存じますが、社中皆様のご健吟を期待いたしております。

ハガキ句も吟行案内もスペースの小さいところへよくぞ、細かくカラー入りでお作りになりオドロキです。旧態依然もいいところ、新しいことは何もせず生を終らんとしている者にとってありがたい限りでございます。句誌の編集も大変な御事と存じ上げております。「白金葎」の誌代をお知らせ頂きたく存じておりますのでよろしくお願い申し上げます。ご自愛を（4/6 長屋璃子）

（長屋璃子さん、なんと申しあげていいのか、端正なハガキを頂きました。字が美しい。更に東京弁というのか標準語の美しさも記憶にあります。新宿のブティックのおかみさんの標準語を入院のベッドで聞いたときの感動がよみがえりました。本誌で紹介したハガキ句44報の一部を左に再録して感謝に代えます。

二月二十六日上野梅の花にて雛の膳（09/3/8）

洞門のそこら縄張り若布刈婆

万世遊

西行忌一人電車に揺られ来し

高志

雛の灯のともる頃まで語り合ひ

璃子

啓蟄のマスカラ飽かぬ千代田線

孝三

烏瓜これが種ぞとPR

陽也

追伸…白金葎は一部五百円を頂いております。高志

今年も早や四月に入り桜の花も満開の季節です。敏子さんお便りありがとうございます。励ましの言葉など気にかけてくれてありがとうございます。毎日夕方頃から我家の愛犬良^{りょう}を連れて一時間ほどのウォーキング続けています。万歩計で見れば一万歩前後歩いていきます。ちよつと膝が痛むので少し減らそうと考えています。もう十年余りコースを変えたりしながら顔見知りが多くてなかなかすんなりと帰宅ができず、時が過ぎてしまっています。現在はあちこちと桜の花をみながらゆつくり歩いています。今は少し心のゆとりもできて、あたりの風景を目にし心のなごむことも数多くあります。（中略）季節の変わり目です。体に十分気をつけて自分の人生を明るく手を取り助け合って生きて行つて下さい。私は今年84才になります。目標として二回目の東京オリンピックを見るのが目標の一つです。2020年前回は1964年、ちよつと無理かなあー。まあいいか今日が良ければそれで良し明日はあしたの風が吹く。どなたにもありますがとうを忘れずに言える人間であり

たいと思います。二人の健康を祈ります。敬白

裏山も雑木林も春きたる

春風にさそわれながら種^種粗^粗したす

(〃 〃 粗浸す)

軒下のパンジー満開水をやり

光成高志 敏子さん(平成27年四月三日 榎田健三)

白金霞三月号第49号ありがとう。拝見しました。

(「明日いかならむは知らず今日の身の今日するわざにわがいのちあり」という津田左右吉の詞があります。高志)

前号で拙句「人間は管切つて繋ぐ喇叭水仙」について、句会やコビアンの茶会でいろいろ合評いただいたと承りました。思わぬ果報と喜んでいます。初案は、止め「水仙花」でした。この方が座りがいい、ただ、人間は「管」とのかかわりが漠、いま一つ響かない。そんな気がして、ふと口をついたのが「喇叭水仙」。いささか自嘲きぶんの作です。ところで、喇叭は、古来、世界各地に伝わる各種管弦楽器の原形、「元祖」吹奏楽器。息(気)吹きは生気を吹く。唇をあていのちを吹く。とはいえ、今も揺れています。初案で句会添削句「水仙花」は正調、座りがいい。比べて、「喇叭水仙」は、合成語の二義性がイメージを分散させ、外連なしとしない。右、「自作は解かない」の俳句を憚らぬ、駄弁をお許し下さい。

(平・27・04・05 飯田孝三)

今月の会費同封致します。古代は別便で、吟行会用と二個を別々に送ります。私は欠席させて頂き下さい。(後略。)

(4/13 小山陽也)

いろいろご心配をいただきまして有難うございました。明日は久しぶりに例会に出させていただけます。ご夫妻はじめ皆さんとの再会が何とも楽しみです。「白金霞」第49号の後選鑑賞と自作弁明駄文を送信させていただきます。草々

(4・16 飯田孝三)

毎々お手数さまです。飯田孝三氏のリハビリ機能回復心からお祈り申しあげます。院内歩行四五千歩。必ず好日好運が訪れましょう。高志氏は夕食前鉄棒にぶら下がるといふ。本当だと思うが、小生、不謹慎だが赤提灯までかつきり六百歩。これがお目こぼしの強行軍。効いてますぜ。

(h 27・4・14 青木啓泰)

(お礼)ひさびさの例会出席を皆さんに温かく迎えられ、感謝のほかありません。きれいな花束まで頂戴し、有難うございました。あらためてお礼申しあげます。草々

戴いて四月は花のアラカルト (平27・4・19 孝三)

作品集のお話思いもがけない事なのでびっくりしました。何とも恥ずかしいやら嬉しいやらです。あまり無理をしないで下さい。孝三さんも復帰。益々の発展を祈ります。

(4/19 昭七)

先月は拙文「北海道蝶採集」を誌上にご紹介いただき

有難うございました。私的な文ですけど虫山蝶太郎さんに見せたら、昆虫週刊誌に出してしまいました。冊子は少しあるので読んで下さる方に差し上げます。小生明日から「国展」の下準備で何日か美術館に行きますので、急いで書いた鑑賞文不備もありますがお許しを。

受贈誌（H27年4月号）

阿羅漢のみんな福耳囀れり（彩122号）

平野ひろし

沢筋の寸土余さず山山葵（〃）

〃

鍵穴は古墳の形寒月光（〃）

清野かつ江

雪兎赤き実二つ置きて消ゆ（〃）

茂木つや子

佐保姫にメタセコイアの代赫色（〃）

杉山晃美

オレンジの滑走路灯枯野走す（飛行雲74号）

駿河岳水

満州会最後五人の年忘（〃）

〃

佐保姫の電車乗り継ぐ旧宿場（あすか4月号）

山尾かづひろ

春潮や帆のかたちてふ白秋碑（俳枕219）

長屋璃子

こだま

彩122号（平野ひろし主宰抜き）

初泳後ろ後ろへ水送り（47号）

光成高志

山焼きの炎一気に山登る（48号）

〃

俳窓評論纂

＊彩122号の富士の国から（南麓ぐうたら日記3）不二南麓著が面白いことに気づいた。前号も読んでみた。面白いのは心象的な文章は少なく事実をさっさと書いて居られること、富士山を見ながら富士と共に生活されているからであろう。遠く離れた私も富士山が見えると嬉しくなつて元氣が出てくる。ひろし先生もそうであるに違いない。パソコンに向う作家生活、俳句の実作者の生活が見えてきて共感するからだろう。南麓さんは存じ上げていないから余計素な気持ちで読めるのかもしれない。もう少し読んでみたい気分である。青江由紀夫さんの「銀次郎日記」もそろそろ出てくるでしょう。待っています。

＊青木啓泰さんから茨城川柳四月十一日掲載の選が送られてきた。沢山の投句の中から二十五句選され、うち十句に寸評を書かれてある。これだけでも大変な作業です。露のとう花が開けば捨てられる 銚田市 戸田はつ枝
食べ物も女性の値打ちも旬がある 日立市 橋 和之
これら二句の寸評は如何に？前は「何でも番茶は出ばなです。」後は「食べ頃よね。」とある。啓泰さんの今月の句、「蛤の砂吐く月夜の「点と線」」を考えながらこれを紹介したが、まだ清張の作品と蛤が結びつかない。茨城川柳の選は啓泰さんの息抜になっているようだ。

旅のうたを読む

XIV

武者昭七

春 安西冬衛

てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った

「春」というタイトルやら「てふ」という可憐な昆虫のイメージやらから僕はようやくやってきた、しかし、光あふれる北国の駘蕩とした情景を思いうかべるだろう。春への賛歌というわけである。しかしもう一度読み返してみれば「韃靼海峡」という北の海の荒涼とした情景やら、はたして蝶がそこを越えて渡るものなのか(蝶の海峡越えは聞いたりテレビの映像で見たりしたことはあるけれど、だいたい鳥の渡りと同じで群れを作つてのことらしいのだが、一匹とは?この辺のことは蝶に詳しい陽一さんにぜひ聞いてみたいと思つています)という疑問やら、渡って行つたというけれどもはたして対岸に行き着いたのだろうかという不安やら、それとも途中で力尽きて暗い波間を漂つてはいはしまいかというおそれやらさまざま思いにとらわれる。か弱い「てふ」の翅に浅春の北の海の風は冷たすぎないか、そう思うと春に背いて荒い海峡を渡って行つた「てふ」の孤独と宿命とが胸に迫ってくる。この詩の「てふ」にぼくら一人一人の背負っている孤独と宿命を見るのは誤りだろうか。加えて、これからぼくらの渡っていく海峡はどんな海峡だろうか、そんなことまで考える。あえてこ

の詩の「旅」の詩に入れた所以です。

この詩の構成上の要件について作者は「てふてふ」という平仮名と韃靼という漢字のもつフィジカルな形象のはげしい対照。その照応から抽出されるメタフィジカルな精神の対照の美ということになる。とのべているという。(村野四郎「鑑賞現代詩 昭和篇」2015・2・3)

我孫子日記

3/20	例会
3/25	SOA
3/29	*
3/30	代々木上原
4/1	*2 布佐
4/2	*3 明治村
4/12	*4 大山
4/14	*5 吉高の大坂
4/15	築地
4/17	例会

*春愉し古賀メロディの中にある

みち

*2 圧されたる畦の照りをり夕日受け

高志

*3 木瓜真紅根府川石の並びにて

〃

漱石の猫の見てゐる庭の木瓜

みち

*4 信長に有樂斎あり苔の花

高志

花のトンネル自衛隊機の朝を飛ぶ

みち

*5 山桜地に菜の花と諸葛菜

高志

水入る田日ごとに増ゆる総の国

みち

編集後記

源氏物語に加えベルグソンとフロイトを読んでいる。

白金霞 第50号 平成27年4月発行 編集・発行人 光成高志(TEL & FAX 04・7187・1068 発行所〒270・1119 我孫子市南新木2-14-17 表紙の題字・加納綾女 写真4月23日の白金霞)